

# 植野 春奈

うえのはるな

## 生きた文学を生かせる人生

### 文学の奥深さに魅せられて

日本文学、なかんずく近代文学にはパラエティに富んだ作家が多く、優れた作品があります。今紹介いたします、植野春奈さん(人間社会学科 日本文学国文学研究室・鳥羽耕史 助教授)も、その近代文学に魅せられたひとりです。

「中学生時代から国語が好きでした。大学に入って、一般教養で先生の講義を受けておもしろかったこと、国語と文学の授業の違い、作品の読み方やとらえ方にますます興味が深まりました」

と語る植野さんですが、「心理學にも興味があったんですが、文学に描かれた心理の方が深く感じられます」

さて、多くの作家の中から植野さんが卒論の対象に選んだのが国木田独歩で、彼の多くの作品から「春の鳥」を取り上げました。初めて読んだときから心にとどまった作品で



参考になることがたくさんあります」といふ感想が聞かれました。

鳥羽先生は、県立文学書道館の開催するイベントについて新聞に依頼されて寄稿したりすることもあり、多方面で活躍。

他のゼミのように「コンパなども開きますが、新入生歓迎や追い出しなど、受講生の運営に任せて必要最低限。しかし受講生の中にと生徒と区別がつかないほど若く、就職の相談など、先輩のような存在として受講生と同じ世代感性でゼミを進めていきます。

文学を学んだからといっても、国語の先生や関係する職業に就くという人は少ないようですが、文学を通じて学んだことは、受講生それぞれの人生の中で生かされています。「ゼミ」に参加して、本を読まむじみのおもしろさが増しました。文学から学んだことを、社会に出るか

す。

国木田独歩は1871年に千葉県 県銚子で生まれ、本名は哲夫。東京 専門学校(現在の早稲田大学)に在学中、「青年思海」「女学雑誌」に投稿。日清戦争の時には「国民新聞」の従軍記者として記事を書きました。その後、1897年に最初の小説『源叔父』を発表。代表作としては『武蔵野』『忘れえぬ人々』などがあります。

「春の鳥」は知的障害児を描いた作品です。主人公、六蔵は「から十までの数がどうしても読めません」という人でした。六蔵は「空を自由に飛ぶ鳥がよほど不思議」だったようで、ある日は、城山と呼ばれている山の高い石垣の上から飛び降りて死んでしまいます。その時小説の語り手は「六蔵は鳥のように空をかけるつもりで石垣の角から身をおどらしたものだ」と思っ、という内容です。  
〔注〕内は本文参照

若い植野さんは、この古い作品のどこにひかれたのでしょうか。「作品の中にある悲哀感、死」について

ら生かせることは多いと思いますし、読書はずっと続けます」と、植野さん。

最後に、読書について、フィンランドの女流小説家リーナ・クルーンの言葉を紹介します。「文学は何を私

に教えてくれたのか、ということ。私が文学から学んだこと、それは、人の生は取るに足りないものではない、ということ。人が成すことも、人が成す行為も、自分と無関係ではないのです。文学は、無関心や不熱心や無頓着と闘っています。人間という個体は短命で小さな現象ですが、人が与える意義や担う意義というのは小さくはありません。それは、人が選択したり行動したり言葉を発したりするうえで存在し、あらゆる瑣末な日常の中においても、その意義自体においても存在するものなのです。」

(リーナ・クルーン講演

「筆を執る必然性」より抜粋

訳末延弘字

東海大学湘南校舎 北政週間 松前記念館講堂

2004年11月9日 15:15-16:30

フィンランド文学情報サイト

<http://krijojenpuutarha.pupu.jp/>

※この許可を得て掲載

や、人と人とのふれあいなど、何度も読むごとに深くなっていくのがおもしろいです。それに古い文章は素朴で簡潔で読みやすいです」

### 文学は人生のシミュレーション

研究室(ゼミ)には現在、社会人1名を含んで13名の参加者がいます。毎回それぞれの受講生が持ち回りで戦後を中心とする近代文学から選んだ作家や作品について、その生い立ちや作品の感想などを発表します。「発表は本人のやりたいことを尊重しています。その上で、ひとりよがりやの感想にならないように課題を出したりアドバイスをしています」と、鳥羽先生。植野さんや受講生たちからも、

「発表のあと、違つ意見や感想、読み方などが得られることはとても勉強になります。また自分の興味のないものを読んだり勉強することは、こういう機会がなければないので、



# Haruna Ueno

